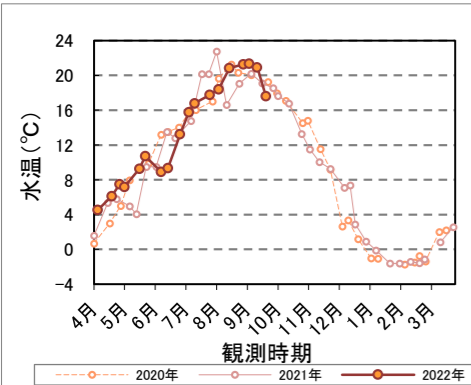


◎オホーツクタワーの動物プランクトン分析速報 (2022年9月)

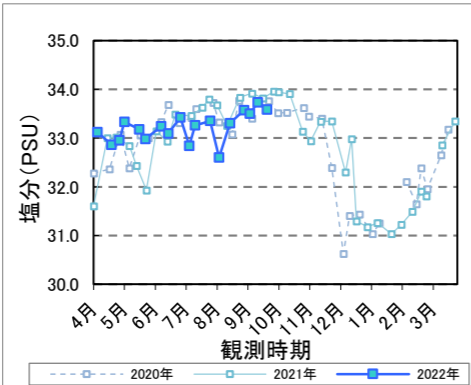
海洋環境データ

※観測：紋別市

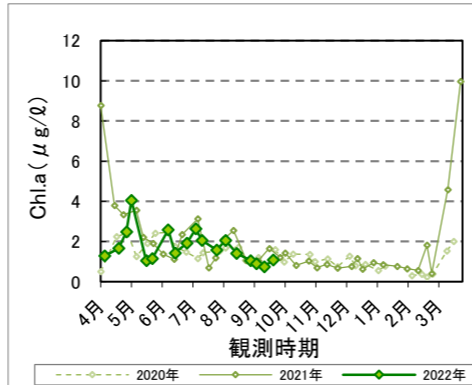
◎水温 (0~9mまでの平均値)



◎塩分 (0~9mまでの平均値)



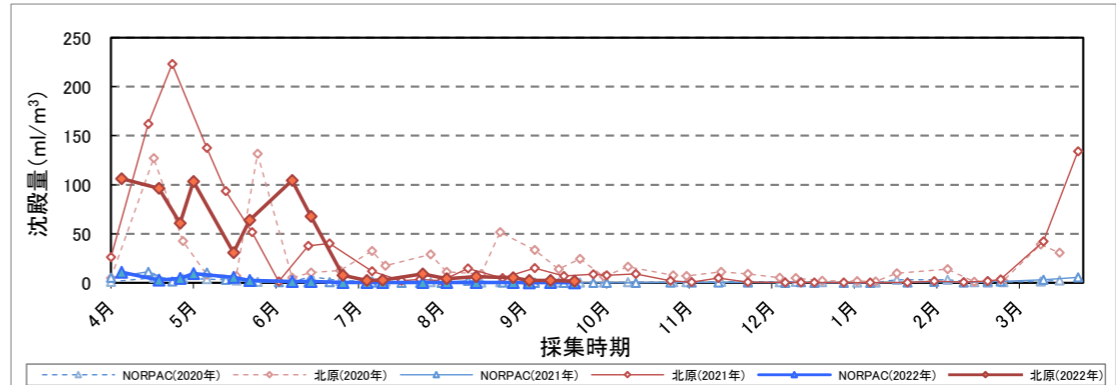
◎Chl. a (0~9mまでの平均値)



動物プランクトンデータ

※分析：(株)エコニクス

◎動物プランクトン・沈殿量



概要

Table with 3 columns for dates 9月5日, 9月13日, and 9月22日. Rows include: 平均水温 (°C), 平均塩分 (PSU), 平均Chl.a (µg/L), 沈殿量 (ml/m³) for NORPAC and local nets, and 主な出現種 (Main species) for both net types. Species listed include Acartia, Centropages, Paracalanus, Penilia, Clausocalanus, Oithona, Pseudodiaptomus, Temora, and Labidocera.

出現量の多かった種類

Grid of images and descriptions for species with high abundance: Acartia steueri, Copepoda (nauplius), Centropages abdominalis, Podon polyphemoides, Paracalanus parvus, Penilia avirostris, Pseudodiaptomus marinus, Temora discaudata, Mesocalanus tenuicornis, Oithona nana, Oithona similis, Copepoda (nauplius), Podon polyphemoides, Paracalanus parvus, and Oikopleura longicauda.

※海洋環境データ欄の水温、塩分、Chl.aのグラフは、水深0~9mまでの平均値をプロットしたものである。平均水温、平均塩分、平均Chl.a欄の数値は、表示の都合上、水深0~9mまでの平均値を小数第2位で四捨五入した値で示し、グラフ上の表示と異なる場合がある。
※種名の先頭に“◎”がつく種類は、出現量の多い種類を示す。[]内の“+”は分析者の経験から、サンプル中の個体数の多さが後述の程度であると判断し、区分したグループである(+)出現、(++)やや多い、(+++)多い、(++++)かなり多い、(++++)極めて多い)。
※種名の後ろの記号は、分析者の経験から北海道における出現傾向に後述の特徴があると判断し、区分したグループである(◆冷水性種、◆暖水性種、■汽水性種)。
※今月のサンプルには動物プランクトンとしての分析対象ではないが、ヤコウチュウ Noctiluca scintillans が多く含まれており、沈殿量の数値はこれを含む。

①千原・村野 (1997) 日本産海洋プランクトン検索図説[東海大学出版会] / ②山路 (1966) 日本海洋プランクトン図鑑[保育社] / ③岩国市立ミクロ生物館 監修 (2011) 日本の海産プランクトン図鑑[共立出版]
④Wilson, M. S. (1966) North American Harpacticoid copepods. 8: The Danielssenia sibirica group, with description of D. stefanssoni Willey from Alaska. Pac. Sci. 20 (4), 435-444.
⑤Pinchuk, A. I. & Hopcroft, R. R. (2006) Egg production and early development of Thysanoessa inermis and Euphausia pacifica (Crustacea: Euphausiacea) in the northern Gulf of Alaska. J. Exp. Mar. Biol. Ecol. 332, 206-215.
⑥林 (2006) 水産無脊椎動物学入門[恒星社厚生館] / ⑦Ohtsuka, S., H. Itoh & T. Mizushima (2005) A new species of the calanoid copepod genus Centropages (Crustacea) collected from Shimizu Port, middle Japan: Introduced or not? Plankton Biol. Ecol. 52 (2), 92-99.
⑧西・加藤 (2002) 日本産カムリゴカイ科多毛類の分類について, タクサ. 13, 5-17. / ⑨今島 (1996) 環形動物 多毛類[生物研究社] / ⑩日本プランクトン学会 監修 (2011) すかん プランクトン[技術評論社] / ⑪水島・鳥澤 監修 (2003) 漁業生物図鑑 新北のさかなたち[北海道新聞社]
⑫古賀 (1960) Centropages abdominalis SATOのノープリウス幼生. 日本水産学会誌. 26 (9), 877-881. / ⑬伊藤・水島・久保田 (2005) 駿河湾三保沖におけるカラヌス目カイアシ類の季節的消長. 東海大学紀要海洋学. 3 (1), 19-35.
⑭大越・野村 (1990) 穿孔性多毛類Polychaetaによる北海道地方、東北地方沿岸のホタテ貝浸食状況. 日本水産学会誌. 56 (10), 1593-1598. / ⑮澤水・久保田・平野・リンズィー (2015) 日本クラゲ大図鑑[平凡社] / ⑯奥谷 (2017) 日本近海産貝類図鑑【第二版】[東海大学出版部]
⑰大塚・上田・岩淵・伊東・徐・坂口・平野・木村・上野 (2007) 移入種か、在来種か? : 清水港から記載された浮遊性カイアシ類の1種の導入の可能性を検証する. 日本プランクトン学会報. 54 (1), 30-38.